

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合上、本文を省略した箇所がある)。

今、なぜ消費社会について考えなければならないのだろうか。

その答えは、まずは <sup>a</sup>ジミイにみえる。私たちは日々、消費を積み重ねながら暮らしている。本を買い、レストランに行き、マンションを買うといった直接的な消費だけではない。水道の蛇口をひねり、灯りをつけるといった本当は料金が発生していることがあまり意識されない消費もある。さらにはテレビをみて、ネットを利用するといった「広告」や「課金」などのかたちで他の誰かがおこなう支払いに便乗した間接的な「消費」も含めれば、私たちが購買活動にかかわらない日はないといっても <sup>b</sup>カゴンではない。

① こうして当たり前のようになりかえされている消費、またそれが積み重ねられることでつくられた消費社会に対して、ただし近年では批判が手厳しい。

ひとつに消費社会が非難されるのは、それが所得の「格差」と深くかわり成立していると考えられているからである。ある商品を買える者もいれば、買えない者もいる。それを決めるのはたしかに保有する金銭の量なのだが、消費社会はそうした貨幣所持にかかわる「格差」を前提に維持され、またその拡大を助長していると疑われている。

そしてだからこそ消費、また消費社会は批判される。格差をできるだけ減らし、消費にかかわる「不公平」が生じないようにするために、福祉国家を拡大し育児や教育などの基礎的なサービスを充実させることや、究極的には「平等」な配分を実現するための <sup>※1</sup>コミュニケーションが唱えられる。消費社会は所得の「格差」を前提として成り立つ社会とみなされ、そのためにそうした社会、あるいはそれを支える資本主義を変革することが目指されているのである。

とはいえ社会体制そのものを変えることは、相当に困難にちがいない。だからこそ代わりに、個人のできる <sup>c</sup>ハンイで消費のやり方を変えることを <sup>d</sup>トク者も多い。この場合、他人の目を意識した「不必要」な(とみられる)消費を減らし、自分に似合った、本当に良いとされるモノ、さらには具体的な形を取らない経験にお金を費やすことが大切であると自己啓発的にトかれていくのである。

たとえば <sup>※2</sup>三浦展はモノの真の価値や人との関係を重視した消費を「第四の消費」として持ち上げている。ブランド品ではない、一見質素だがつくり手のみえる食器や服を買い、旅行や音楽鑑賞などの体験を楽しむこと。通俗的にはたんなるモノから、体験や込められた思いを重視したコトへの価値観の転換と主張されるこうした消費は、金銭的または時間的コストがむしろ大きいという意味で、社会における「格差」そのものを減らすことはたしかにできない。だがだとしても「格差」に基づくみせびらかしの行為から購買活動が切り離されているようにみせかけることはできる。つまり <sup>②</sup>それによって消費を罪深い資本主義的な活動から免責することが試みられているのである。

他方、「格差」に基づくことだけでなく、消費や消費社会が環境を破壊していることも近年では強く非難されている。大量生産された商品を次々と消費する営みが環境にとって負荷が多いことは、たしかに誰にも否定しようがない。とくにかつて後進国とされた国が続々と大量生産・大量消費に加わるなかで、二酸化炭素排出増加に伴う温暖化の危険はますます切迫していることは否定できないのである。

だからこそ消費社会を超える道が模索されている。ひとつ目はこの場合も個人的に対処する道で、環境負荷の高い商品避け、環境に優しい(とされる)商品を買うことが勧められる。<sup>※3</sup>「エシカルな消費」や「エコ消費」と呼ばれるこうした消費はハイブリッド車の購入やエコバックの使用などのかたちで、たしかに一定の市民権を今では獲得している。

(中略)

いまではエシカル消費の流行の波に乗り、エコであることとうたう洗剤や食品も増加している。 <sup>③</sup>ただしこうした変化が、消費社会を全体として変えたかどうかについては疑問が残る。 <sup>X</sup>本書で後に「リバウンド効果」として確認するように、エコな商品の購買は、さらなる消費のための <sup>※4</sup>アリバイとなることがある。ハイブリッド車や電気自動車をあらたに製造すると、ガソリン車に乗り続けるよりもエネルギーがかかるだけではなく、それを買って安心してより多く乗り始めることで二酸化炭素の排出量を大きくする場合があることさえ確かめられているのである。

効果が不確かであるにもかかわらず、次々と異なる対象がもてはやされるという意味では、 <sup>Y</sup>こうした乗り越えの試みそのものが消費社会の流 <sup>フアンション</sup>行であった可能性が高い。環境に優しい商品だけではなく、<sup>※5</sup>「ロハス」や「シェア」、「ていねいな暮らし」や <sup>※6</sup>「ミニマリスト」的暮らしなどあらたなブームが起り、新規な消費の対象が紹介されてきた。 <sup>Z</sup>社会総体を変える気配もないままに、それらはあらたに現れるブームに取って代わられていく。その意味でそうしたブームは他の人に自分の道徳的、感性的「正しさ」をみせびらかすモードとして、消費社会を延命することに仕えてきたのではないかという疑いが合理的に残るのである。

こうしてある種の論者の非難にかかわらず消費社会が人びとに受け入れられてきたという事実上の問題だけではなく、消費社会を超えるという提案が望ましい社会を約束しているのかという権利上の問題もある。消費社会に対する批判は、人びとが同じような道徳的関心を持ち、平等に暮らしている未来を描いてみせる。しかしそうした社会が消費社会以上に本当に望ましいもの

であるのかどうかについては、④ 慎重に吟味しておかなければならないのである。

実際、本書は、消費社会がその根本において実現している多様性や自由をあくまで大切なものと考え、金を持つかぎりにおいて、私たちはこの社会において自分が望むものを何であれ、好きに買うことが認められている。消費が約束するこうした具体的な自由を過小評価してはならない。それはひとつにそれが、この社会では多様性の根拠になっているからである。酒を飲んだり賭けごとをするなど、たとえオロかなことと他人から判断されようと、自分の望みをこの社会で私たちは押し通すことができ、それをもとに私たちは「私」自身であることが具体的に許されている。

けれども消費社会を乗り越えようと吹聴する企ては、こうした自由や多様性の大切さについて十分な配慮を払ってこなかった。平等や環境保護を実現するためには、多かれ少なかれ国家による規制や強制が避けられないが、それが消費社会で空気のように享受されている自由や多様性を損なう危険性についてはあまり真剣に考慮されてこなかったのである。

(貞包英之『消費社会を問いなおす』による)

注 ※1 コミュニズム——共産主義。ここでは、財産を私有ではなく共同体による所有とすることで、貧富の差をなくすことを目指す思想・運動・体制という意味で使われている。

※2 三浦展——日本の評論家・消費社会研究家。

※3 エシカルな消費——倫理的消費。地球環境や、人、社会に対して配慮されたものを購入・消費すること。

※4 アリバイ——不在証明。ここでは、さらなる消費を行う後ろめたさを和らげてくれるものの意味で使われている。

※5 ロハス——生態系や環境の保全に加え、人間自身の健康も持続的に保つ生活スタイル。

※6 ミニマリスト——ものを減らして最低限のもので暮らす生活スタイルを目指す人。

問1 波線部 a s e のカタカナを漢字に直せ。ただし、楷書で大きく丁寧に書くこと。

問2 本文中の X Y Z に当てはまる語句として最も適当なものを、次のア～カのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア つまり イ しかし ウ むしろ エ かりに オ たとえば カ なぜなら

問3 傍線部①「こうして当たり前のようになりかえされている消費、またそれが積み重ねられることでつくられた消費社会に対して、ただし近年では批判が手厳しい」とあるが、「批判」の内容について七十五字以内で具体的に説明せよ。

問4 傍線部②「それによって消費を罪深い資本主義的な活動から免責する」とあるが、これはどのような状況について言っているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 「第四の消費」によって手間がかかるようになるが、その自分分の思いを反映することができるため、「格差」を無意味と感ずるようになるということ。

イ 「第四の消費」によって消費活動のサイクルが長くなるため、見せびらかしに出会う頻度が少なくなり、「格差」を感じる機会も減少するということ。

ウ 「第四の消費」によって一人一人が自分にとって良いモノを購入するようになるため、他人と比較するということがなくなり、「格差」を気にしなくなるということ。

エ 「第四の消費」によって金銭的及び時間的な負担は大きくなるが、内面の充実を目指す消費であるため、「格差」そのものは見えにくくなるということ。

オ 「第四の消費」によって皆が不必要なものを買うことがなくなるため、社会体制を変えることはできないけれども、「格差」は目立たなくなるということ。

問5 傍線部③「ただしこうした変化が、消費社会を全体として変えたかどうかについては疑問が残る」とあるが、それはどうか。その説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 私たちがエコを重視する人間であると示そうとして、エコな商品が開発されるたびに購入をしようというので、結局従来と同じような消費活動を続けてしまうから。

イ 私たちがエコを求める人間になったために、市場はエコのみに焦点を当てて商品を大量に生産するようになり、商品の購入量を増やすことにつながっているから。

ウ 私たちが自分の「正しさ」を広めようとして、他人にもエコな商品を購入することを求めることで、多くの人がエコ商品を購入してしまうことになっているから。

エ 私たちが大量消費から目を背けようとしてエコを意味するあらたな言葉を作ると、それに合わせた商品が開発され、結果的に購買意欲をそえられることになっているから。

オ 私たちが次々と新しいものを求めるために、エコを売りものとした一時期のブームもあらたなものに取って代わられ、エコ商品を広めることができなかったから。

問6 傍線部④「慎重に吟味しておかなければならないのである」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。八十字以内で説明せよ。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

【著作権の都合により掲載しておりません。】

問1 波線部 a e のカタカナを漢字に直せ。ただし、楷書で大きく丁寧に書くこと。  
問2 二重傍線部 X 「げんなりして」・ Y 「斜に構えた」の本文中での語句の意味として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

X 「げんなりして」

ア	がっかりして
イ	うんざりして
ウ	ぐったりして
エ	かりかりして
オ	ほっこりして

Y 「斜に構えた」

ア	まじめな
イ	迷っている
ウ	ぼんやりした
エ	意固地な
オ	からかい気味な

(辻村深月『この夏の星を見る』による)

問3 傍線部①「亜紗は自分が眠れないことに気づいた」とあるが、この頃の「亜紗」についての説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア すぐ終わると思っていた休校が予想以上に長引いてしまった状態に直面したことで、一日一日が過ぎていく早さにとまどっている。

イ 休校のうちにやっておきたかったいろんなことにまだ手をつけられていないことに気づき、悔いの無いようにやらないといけないと焦っている。

ウ 休校の期間を過ごしているうちに当たり前のように我慢することに慣れてしまった自分に驚き、どうすればよいか困惑している。

エ 今まで過ごしていた日常が休校に入ってから失われていっていることにもどかしさを覚えながら、どうすることもできなくなっている。

オ 休校の間は友達と会わずに連絡を取り合うだけにしておこうと思っていたのに、そのことすらも満足に守れない自分が情けなくなっている。

問4 傍線部②「母の顔が一瞬、驚いたように固まる。だけどすぐ、亜紗の体があたたかい腕にくるまれた」とあるが、このときの「母」についての説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 切実な訴えを素直に口にする娘の普段と違った姿に驚くとともに、娘がそれほどまでに追い詰められていたことに気づき、優しく包み込もうとしている。

イ 学校よりも遊びの方に意識が向いていた娘が学校に行きたいと言うのを聞いて驚くとともに、学習に力を入れようとしている娘を温かく見守ろうとしている。

ウ 親が勝手に部屋に入ってきたことを全く気にかけない娘のひどい落ち込みぶりに驚くとともに、娘の疲れた心にしつかり寄り添っていかうとしている。

エ 大人びていると思っていた娘が幼子のように親にすがってくる姿に驚くとともに、頼りなく見える娘の心が落ち着くまでは支えていこうとしている。

オ 自分の友達を大切にしようとする気持ちが人一倍強い娘の姿に驚くとともに、そんな娘の優しい気持ちをできるだけ手助けしていかうとしている。

問5 傍線部③「言うと同時に、ぼたぼたー、と涙が流れた」とあるが、それはなぜか。六十字以内で説明せよ。ただし解答には「自粛」という語句を必ず用いること。

問6 傍線部④「なんだかほっとして、気が抜けた」とあるが、このときの「亜紗」についての説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分は休校期間中かなり我慢をして辛かったが、おしゃれに気を使って過ごしていた友人もいて、やりたいことをやっていたいんだと前向きになっている。

イ 自分は休校期間中かなり我慢をして辛かったが、仲がよかった男子生徒が久しぶりに会ったにもかかわらず、明るく接してくれて心から喜んでいいる。

ウ 自分は休校期間中かなり我慢をして辛かったが、そんなに気を張って過ごしていない友人もいたことが分かって、気持ち楽になり安心していいる。

エ 自分は休校期間中かなり我慢をして辛かったが、友人たちは以前のままだったので、今後も関係は変わらないだろうと思っっている。

オ 自分は休校期間中かなり我慢をして辛かったが、高校生になっても調子に乗った行動をする者がいることを知り、その気ままな様子に驚いている。

問7 傍線部⑤「だけど、その『いつも通り』の中には、もう美琴のコンクールや菜南子の大会は含まれていない」とあるが、ここでの「亜紗」の心情を、解答欄の「かつて存在した日常は、」に続く形で、五十五字以内で説明せよ。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

また※1承保二年の頃にや、西七条に貧しき※2銅細工人ありけり。女子二人持ちてありしが十四十二ばかりにて、母煩ひけるにこの子供をいと懇ろにいとほしくおもひて、夫に返す返す申し置きけるやう、「※3あなかしこあなかしこ、この子供のありつかん程まで継母に見せ給ふな」と、泣く泣く申してはかなくなりけり。男契り置きし事を忘れて、いく程なく妻をまうけたりけり。今も昔も※4なさぬ仲の習ひにて、後の妻この女をあながちに憎み、ある時四五日も物を食はずして命を断たんとぞしける。①この継母の気色を恨めしく思ひて、姉妹※5北野に参りて籠りけり。昼夜涙を流して「天神②助けさ給へ」と愁ひ申して、「失せにし母に孝養報恩をもせぬ身ならば命を召せ」とぞ申しける。さる程に※6御託宣あらたにて、折節同じくこの社に参籠したりける※7播磨守有忠といふ人、驚きて姉を呼びよせその故を問ひ聞き、やがて連れ帰りて妻としけり。さて妹をも※8宮仕へせさせける程に、※9宮を生み参らせて③めでたく栄え、父母の孝養を思ふ様にしける。

〔百人一首一夕話〕による

注 ※1 承保——平安時代の年号。承保二年は西暦一〇七五年。

※2 銅細工人——銅細工をする職人。

※3 あなかしこあなかしこ——決して決して。

※4 なさぬ仲の習ひ——血のつながらない親子関係によくあること。

※5 北野——北野天満宮。菅原道真を祭る。

※6 御託宣あらたにて——祈りによる神様のお告げは、はっきりしている。

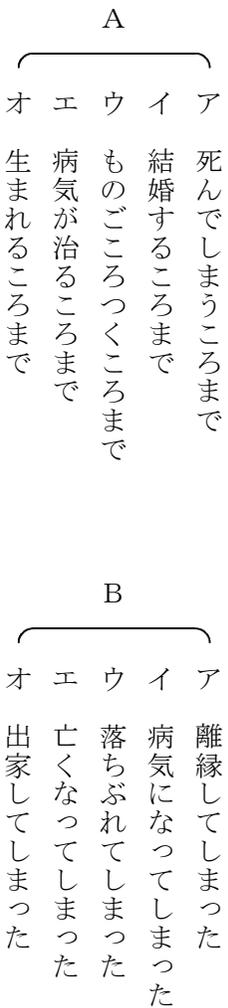
※7 播磨守——播磨（今の兵庫県西部）の国守。

※8 宮仕へ——宮中で帝の側にお仕えすること。

※9 宮——帝の子。

問1 破線部「いとほしくおもひて」の読みを現代仮名遣いで答えよ。

問2 二重傍線部A「ありつかん程まで」・B「はかなくなりけり」の解釈として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。



問3 傍線部①「この継母の気色を恨めしく思ひて」とあるが、姉妹はどのようなことを恨みに思ったのか。四十字以内で説明せよ。

問4 傍線部②「助けさせ給へ」を口語訳せよ。

問5 傍線部③「めでたく栄え、父母の孝養を思ふ様にしける」とあるが、姉妹がそのようなようになった理由の説明として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 播磨守有忠が、継母にひどく虐げられているという気の毒な姉妹の噂を聞きつけ、妹を自分の妻として迎え入れることで助けてやったから。

イ 播磨守有忠が、継母の理不尽な振る舞いを嘆く姉妹の訴えに耳を貸してやり、父親に彼女たちの待遇を改善してやるように命じたから。

ウ 北野の神が、願いが叶わないなら命を取ってほしいという姉妹の切実な祈りを聞き届け、播磨守有忠に引き合わせることで、助けてやったから。

エ 北野の神が、信心深い姉妹を死に追いやってしまおうとする継母の残酷な行為に怒りを禁じ得ず、継母を懲らしめるために天罰を下したから。

オ 継母が、自分たちにつらくあたる継母の命を奪ってほしいと姉妹が祈っていることを知って、恐怖をおぼえ態度を改めるようになったから。